

顎下型ガマ腫の1例

横 林 康 男, 日出嶋 康 博, 前 田 美智之, 川 北 小百合

富山県立中央病院歯科・口腔外科
(主任：横林康男部長)

Plunging ranula: Report of a case

Yasuo YOKOBAYASHI, Yasuhiro HIDESHIMA, Michiyuki MAEDA, Sayuri KAWAKITA

Department of Dentistry, Oral and Maxillofacial
Surgery, Toyama Prefectural Central Hospital
(Chief : Yasuo YOKOBAYASHI)

Key words : plunging ranula (顎下型ガマ腫), sublingual gland (舌下腺)

Abstract : Plunging ranula is a form of retention cyst occurring in the submandibular region. In this paper, a case of plunging ranula which did not respond to the compression therapy is reported. A 38-year-old woman visited us because of a fluctuant swelling of the right submandibular region. A cranial radiograph with injection of 76 % Urografin revealed the presence of a cystic lesion in the submandibular region without extension to the sublingual area. This was further confirmed by MRI. The clinical diagnosis was plunging ranula. Following removal of the cystic fluid by aspiration, the cystic area was compressed by gauze, but the lesion recurred in a month. The compression therapy was repeated again, but proved to be unsuccessful. Thus, extirpation of the sublingual gland and marsupialization of the ranula were performed. Postoperatively, there has been no evidence of recurrence of the lesion for 4 years. Microscopically, there was chronic adenitis of the sublingual gland.

抄録：顎下型ガマ腫は顎下部に生ずる粘液嚢胞で、その報告は比較的少ない。今回、私たちは顎下型ガマ腫の1例を経験したので、その概要を報告する。

症例は38歳の女性で、平成4年7月30日、右顎下部の腫脹を主訴として当科を受診した。全身の所見では問題なく、口腔外所見では右顎下部に腫脹を認め波動を触れた。口腔内所見では右口底部に軽度腫脹を認めた。造影X線所見、MRI所見ともに右顎下部に嚢胞様病変を認めた。

処置および経過：右顎下型ガマ腫の診断にて吸引・圧迫療法を2度行うも再発したため、平成4年12月17日、右舌下腺摘出術、ガマ腫開窓術を施行した。術後3年8か月を経過したが再発は認めず経過良好である。

病理組織学的所見では、舌下腺に慢性の唾液腺炎を生じていた。

結 言

顎下型ガマ腫は顎下部に生ずる粘液嚢胞で、その報告は比較的少ない。

今回、私たちは顎下型ガマ腫の1例を経験したので、その概要を報告する。

症 例

患者：38歳、女性。
初診：平成4年7月30日。

主訴：右顎下部の腫脹。
家族歴・既往歴：特記事項なし。
現病歴：約1年前右顎下部に腫脹が出現するも放置にて消失。平成4年3月頃より同部の腫脹が再び出現したため総合病院内科を受診し、当科を紹介され来院した。
現症：全身の所見では問題なく、口腔外所見では右顎下部に瀰漫性の腫脹を認め、触診にて波動を触れるも圧痛は認めなかった。(写真1)口腔内所見では、右口底部に軽度腫脹を認めるも発赤はなく、波動・圧痛は認められなかった。(写真2)
造影X線所見：ウログラフィンによる造影X線写真では、嚢胞は右顎下部に存在し、舌下部との交通は認めら



写真1 口腔外所見

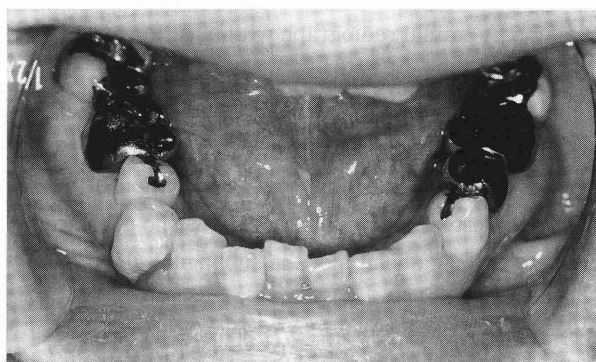


写真2 口腔内所見

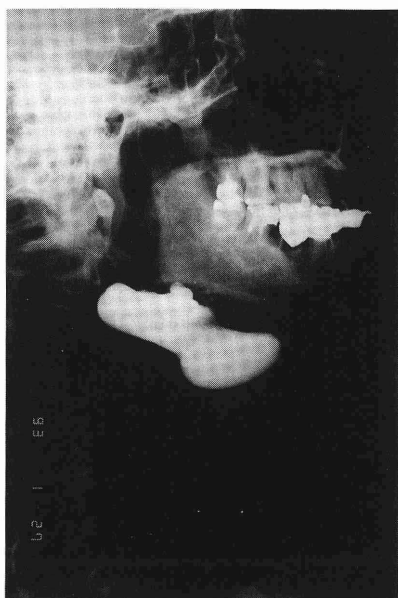


写真3 造影X線所見

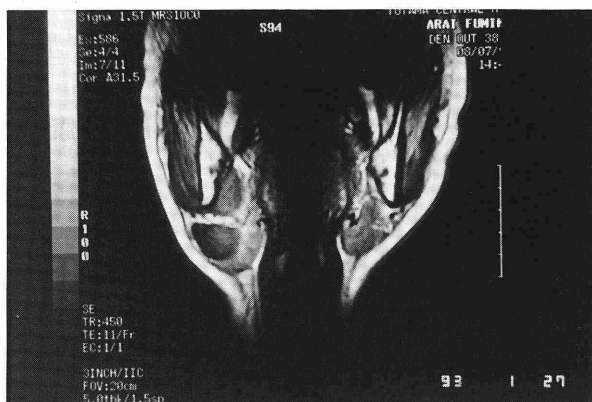


写真4 MRI所見

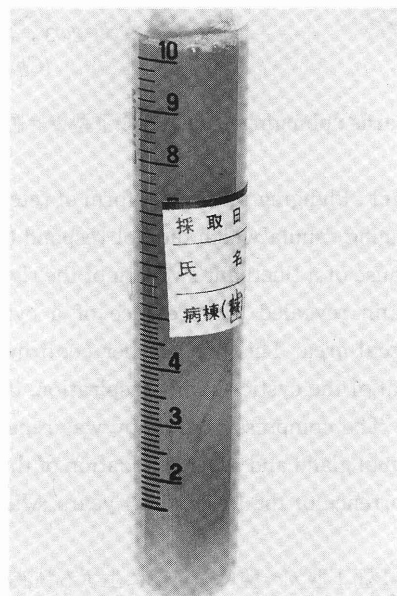


写真5 内容液

れなかった。(写真3)

MRI所見：右顎下部に嚢胞様病変を認め、内容液は粘稠なものが考えられた。(写真4)

処置および経過：右顎下型ガン腫の診断にて、右顎下部穿刺を行ったところ血液を混じた12mlの粘稠で不透明なやや黄色味を帯びた唾液様の液体が吸引された。(写真5) 吸引・圧迫療法を2度試みるも再発したため、平成4年12月17日、全麻下で右舌下腺摘出術、ガン腫開窓術を施行した。(写真6) 右舌下腺前方部には一部径2～3 mm程の粘液嚢胞様となっているところがあり、顎舌骨筋の下部には唾液の貯留した腔を認めたが、舌下腺との連絡ははっきりしなかった。術後3年8か月を経過したが再発等は認めず経過良好である。

病理組織学的所見：舌下腺には慢性の唾液腺炎を生じていた。(写真7)

考 察

顎下型ガン腫は1757年 Louis¹⁾によってはじめて報告

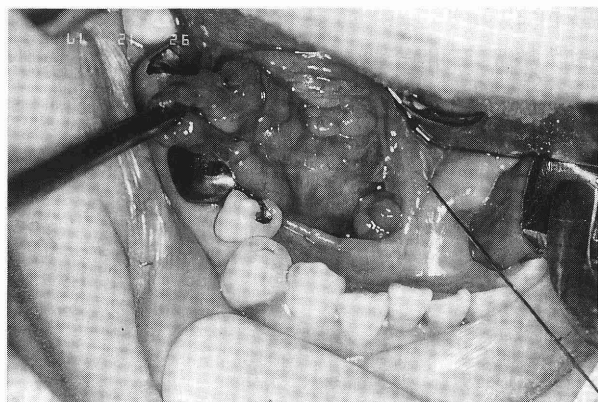


写真6 手術所見

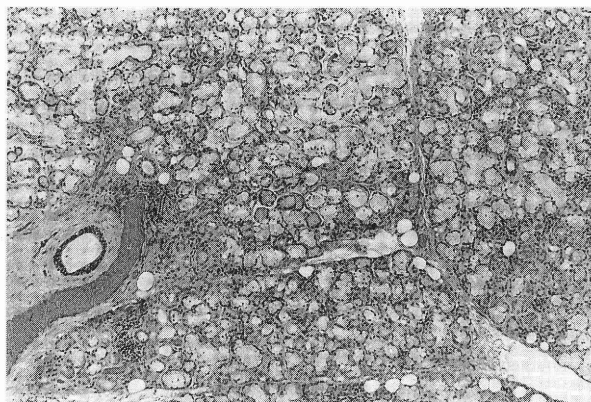


写真7 病理組織学的所見 (HE 染色×20)

された。本邦では1992年までに約110例の症例報告²⁾³⁾がなされている。

性別についてみると、女性に多い²⁾という報告が多いが、本症例も女性に生じたものであった。

年齢別については、0歳代より30歳代までがほぼ同様の発生頻度を示しているもの⁴⁾⁵⁾⁶⁾や、10歳未満の発生頻度が47%ととくに高い報告例²⁾もみられる。本症例は30歳代にみられたものであった。

成因については、Bhaskerら⁷⁾⁸⁾の説のように、外傷などによる舌下腺からの唾液の漏出、貯留によると考えられている⁹⁾。本症例でも手術所見にて舌下腺の一部に粘液嚢胞様となっているところがみられたこと、病理組織学的所見にて舌下腺に慢性の炎症を生じていたことなどより、唾液の漏出説が考えられた。

本疾患と鑑別を要する疾患としては、皮様嚢胞、側頸嚢胞、甲状舌管嚢胞、脂肪腫、リンパ管腫などがあげられる⁹⁾¹⁰⁾。これらの鑑別は部位、臨床経過、症状、X線所見、内容液の穿刺などにより行われるが、本症例ではMRI、内容液の穿刺および嚢胞造影法が顎下型ガマ腫の診断に有用であった。

本疾患の治療法については、嚢胞開窓療法⁵⁾、舌下腺摘出術⁶⁾⁹⁾、舌下腺摘出術と嚢胞開窓療法の併用法¹¹⁾、頸部皮切による嚢胞摘出術ならびに舌下腺摘出術の併用法¹²⁾、放射線照射療法¹³⁾、吸引・圧迫療法¹⁴⁾などがあげられている。本症例では、まず吸引・圧迫療法を試みたが、通院治療のため圧迫が不十分であったためか再発した。そこで入院後、全麻下にて口内法で舌下腺摘出術と嚢胞開窓療法の併用法を行い、良好な結果を得た。このように本疾患の治療法として、舌下腺摘出術と嚢胞開窓療法の併用法は有用であると思われる。

結 語

今回、私たちは38歳の女性に生じた顎下型ガマ腫の1例を経験したので、若干の文献的考察を加え報告した。

本論文の要旨は、第38回日本口腔外科学会総会（於：新潟）において発表した。

引 用 文 献

- 1) Louis: Sur les tumeurs salivaires des glandes maxillaires et sublinguales et sur les fistules que cause leur ouverture. Mem Acad Roy Chir 9: 89, 1757.
- 2) 篠原生徳, 左坐春喜, 他: 顎下型ガマ腫 (Plunging ranula) の臨床的, 組織学的検索. 日口外誌30: 222-230, 1984.
- 3) 上田健, 中島民雄, 他: 顎下型ガマ腫の2症例. 日口外誌25: 1208-1213, 1979.
- 4) Roediger, W. E. W. and Kay, S.: Pathogenesis and treatment of plunging ranulas. Surg Gynecol Obstet 144: 862-864, 1977.
- 5) 岡山秀昭, 坂上昇, 他: 巨大なガマ腫の4例. 日口外誌19: 496-501, 1973.
- 6) Mair, I. W. S., Schewitsh, I., et al.: Cervical ranula. J Laryngol Otol 93: 623-628, 1979.
- 7) Bhasker, S. N., Bolden, T. E., et al.: Experimental obstructive adenitis in the mouse. J Dent Res 35: 852, 1956.
- 8) Bhasker, S. N., Bolden, T. E., et al.: Pathogenesis of mucocoeles. J Dent Res 35: 863, 1956.
- 9) Catone, G. A., Merrill, R. G., et al.: Sublingual gland mucus-escape phenomenon. Treatment by excision of sublingual gland. J Oral Surg 27: 774-786, 1969.
- 10) Nathanson, N. R., Quinn, T. W.: Ranula. Review of the literature and report of three cases. Oral Surg 5: 250, 1952.
- 11) Abbey, F. S., Cohlmi, D. D., et al.: Sublingual cyst. report of a case. OS OM OP 14: 1155-1160, 1961.

- 12) Khaff, R. A., Schwarts, A., et al.: The plunging ranula. J Oral Surg 33: 537-541. 1975.
- 13) Keen, P., Cohen, L., et al.: Plunging ranula: a new-therapeutic approach. S Af Med 6:189-193, 1954.
- 14) 大類晋, 石川誠, 他 : 唾液腺貯留嚢胞に対する吸引・圧迫療法. 口科誌42 : 585-589, 1993.